

MACF 礼拝説教要旨

2024 年 7 月 14 日

「アブラハムの信仰・行く先も知らずに」

ヘブライ人への手紙 11 章

8 信仰によって、アブラハムは、自分が財産として受け継ぐことになる土地に出て行くように召し出されると、これに服従し、行き先も知らずに出発したのです。

9 信仰によって、アブラハムは他国に宿るようにして約束の地に住み、同じ約束されたものを共に受け継ぐ者であるイサク、ヤコブと一緒に幕屋に住みました。

10 アブラハムは、神が設計者であり建設者である堅固な土台を持つ都を待望していたからです。

* * * *

信仰の父と呼ばれるアブラハムの物語は創世記 11 章の後半から書かれています。

そこにはカルデアのウルという土地に住むテラという人とその息子アブラム(のちにアブラハム)のことが書かれています。この親子はカルデアのウルからハランというところまで旅をし、そこにしばらく定住し、父のテラが亡くなってからアブラハムはそこを出て新しいところへの移住をするのです。

創世記 11 章

31 テラは、息子アブラムと、ハランの息子で自分の孫であるロト、および息子アブラムの妻で自分の嫁であるサライを連れてカルデアのウルを出発し、カナン地方に向かった。彼らはハランまで来ると、そこにとどまった。
32 テラは二百五年の生涯を終えて、ハランで死んだ。

そして 12 章に続くのですが、12 章のこの約束はテラの死後与えられたものではなく、彼らがまだウルにいる頃、あるいはその前にもたらされました。

使徒言行録にはステファノの言葉でこう書かれています。

使徒言行録 7 章

1 大祭司が、「訴えのとおりか」と尋ねた。2 そこで、ステファノは言った。「兄弟であり父である皆さん、聞いてください。わたしたちの父アブラハムがメソポタミアにいて、まだハランに住んでいなかったとき、栄光の神が現れ、3『あなたの土地と親族を離れ、わたしが示す土地に行け』と言われました。4 それで、アブラハムはカルデア人の土地を出て、ハランに住みました。神はアブラハムを、彼の父が死んだ後、ハランから今あなたがたの住んでいる土地にお移しになりましたが、

5 そこでは財産を何もお与えになりませんでした、一步の幅の土地さえも。
しかし、そのとき、まだ子供のいなかったアブラハムに対して、
『いつかその土地を所有地として与え、死後には子孫たちに相続させる』と
約束なされたのです。

つまり、この約束が実行に移されるために、アブラハムはしばらくの間、ハランに滞在し
父の死までそこに生活して、時を待ったのです。

神様の命令はすぐに実行すべき時と、神様がはっきり促しを与えて押し出して
くださる時を待たなければならない時があります。アブラムは待ちました。
そして父のテラが亡くなった時、再度、神様の促しを明確に心に受け止めたのです。

創世記 12 章

1 主はアブラムに言われた。

「あなたは生まれ故郷

父の家を離れてわたしが示す地に行きなさい。

2 わたしはあなたを大いなる国民にしあなたを祝福し、あなたの名を高める
祝福の源となるように。

3 あなたを祝福する人をわたしは祝福しあなたを呪う者をわたしは呪う。

地上の氏族はすべてあなたによって祝福に入る。」

4 アブラムは、主の言葉に従って旅立った。ロトも共に行った。

アブラムは、ハランを出発したとき七十五歳であった。5 アブラムは妻のサライ、
甥のロトを連れ、蓄えた財産をすべて携え、ハランで加わった人々と共にカナン地方へ向かって出発
し、
カナン地方に入った。

75 歳で「父の家を離れ」「神が示す土地」に一族全てを引き連れて旅することに踏み切ったの
です。

これはまさに「自立・独立」の一步でもありました。

同時に、それは「まさに、今が時」だと領けたのでしょ。

また、神様の約束は素晴らしいものでした。

「大いなる国民にする」

「祝福の源となる」

「地上のすべてがアブラハムによって祝福に入る」

でも、これらの約束は彼にとっては信じがたいものだったと思います。というのも、

彼らには自分たちの息子がいなかったからです。

自分たちには息子も娘もないのに、どうして「大いなる国民」になれるのか、

「地上の全ての人への祝福の源になれるのか」

これはアブラハムにとって、重大な課題であり、疑問でもあったと思います。

しかし、それも含めて、アブラハムは神様の促しに応答したのです。

1) 時を待つ

2) 時を見定めて出発する

3) 神の促しに敏感に応答する

4) 不安も貧しさも不自由も想定内の出来事として領く

5) 神の用意してくださっている都(ゴール)に期待する

「行く先も知らずに出かけた」

この聖句は友人でもあり、臨床美術の創始者でもある金子健二さんが大好きな

もので、折あるごとに、この言葉を自分にも仲間たちにも言い聞かせていました。

やはり私の友人の木村伸医師が埼玉県伊奈町にクリニックを開設するにあたって

金子さんは木村先生にこの言葉を送っています。周囲にはまだ住宅もほとんどなく

森と畑の真ん中にクリニックの土地があって、「ここに本当に患者さんたちが集まって

くるのだろうか」と誰もが疑問や不安を抱いている中、金子さんだけは「木村先生が

いのちをかけて開設しようとしている臨床美術と医療を一緒にやろうとしている

クリニックの建築に必要な意識はアブラハムの信仰であり「行き先を知らずに出て行った」

という意気込みでしょう。ここは森に囲まれた素晴らしいクリニックになりますよ。

まだ先は見えませんが、しっかり前に進みましょう」

と訴えていました。

懐かしく思い出しました。

さて、普通の生活の中で、「行先を知らずに出ていける」のは「帰る家」のある人です。

帰る家があれば、ふらりと外に出て旅をしても、戻れる場所がありますから安心です。

しかし、アブラハムの場合には、家族親戚、家財道具一式、全部まとめて、その地を去り

旅を始めたのです。

遊牧民だとすれば、なんとなく、それもありかなと感じますが、実際問題としては

身の落ち着けどころを持たぬまま、荷物をまとめて出ていくのは大変なことであり、一般的に

は異常事態だと思います。

人間的な「受け入れ先」「収入源」などがあれば、それを当てにして出ていくことはそれほど

難しくはないかもしれません。

でも、アブラハムにはそれがありませんでした。だからこそその苦労も不安もあったと思います。

ただ、彼には「神様の約束」がありました。しかも、祝福の約束がありました。

信仰の父と呼ばれるアブラハムはその約束を信じて従ったのです。

その信仰による歩みが高く評価されているのです。

神様は時に、私たちに役割を託し、「さあ、今、この場所を離れて出かけなさい」とお語り

くださることがあります。新しい使命を与えてくださることもあるでしょう。

アブラハムは行く先を知りませんでしたが、私たちの「行く先」はある意味、明確です。

「イエスさまのいるところ」であり、「イエスさまのところ」です。

マラソンや駅伝のゴール近くでタオルと水をもって待機している仲間のように、イエスさまは私たちのゴール地点で待っていてくださるでしょう。

それはこの地上における働きもそうでしょうし、この地上での働きを終わってのゴール地点もそうだと思います。

イエスさまが「私が道であり、真理であり、いのちなのです」と語ってくださっていますから私たちはイエスさまに近く歩み、イエスさまの待っているところに向かってあゆみを重ねていけば良いのです。

その歩みのところどころで様々な不安もあるでしょうが、同時に祝福もあるはずで

あなたが祝福の源となり得る可能性が大きいのです。

そうは言っても現実的な働きや使命の遂行にあたって「イエスさまのところ」というのは難しいので「やはり行先はわからない」と言わざるをえない場面が多いですね。

どこまで拡大し、どこまで出来るのか、未知数ですから、そこでは神様からの使命を確認しそれをしっかり後ろ盾にして、前に進むことが重要ですね。

「促しに基づいて動くから、先が見えてくる」という歩みだと思います。

あまり自分を過小評価せず、また過大評価もせず、1日1日、前に進もうという意識でやっ

ていかないと息切れしてしまいます。

うまく行っても、高慢にならず、失敗しても卑屈にならず、淡々と継続的に上にあるものを思い

ながら
歩を進められると良いですね。

Youtube での MACF 礼拝映像は

<https://youtu.be/CnD7Uga4Rz0>

です。